

『アラブ古典音楽の旋法体系：アレppoの歌謡の伝統に基づく旋法名称の記号論的解釈』解題—意識下の構造を解明する試み—

飯野 りさ(日本学術振興会 特別研究員(PD))

本発表では、この 2 月に刊行された拙著『アラブ古典音楽の旋法体系』(2017 年、スタイルノート)の解題を行う。同書は、エジプトからイラクの一部までを含む東アラブ地域の中でも伝承歌謡であるムワッシャフなどで有名なアレppoの伝統を基に、その伝統を実践する宗教歌手たちのもとに残った名称群による旋法の体系が、感性に基づきながらも非常に論理的に構築されていることを明らかにしている。二部構成をとり、第 1 部「ナガムをめぐる文化内在的枠組み」ではまず音的響きに対する感性がラーストやバヤーティーなどの諸名称の助けを借りてある種の旋法体系を形成していることが論じられ、その結果得られた知見が第 2 部「旋法の名称とその音楽学的機能」で理論的側面から分析されている。

この研究の特徴はいくつかあるが、音楽だけでなく言葉を形成する音声に対する感性も考察対象に広げ、対象としている伝統の音文化的背景を土台にして議論を進めている点がまず挙げられる。これにより、次の段階である音楽の人に与える心理的な影響を中核概念として持つ「タラブ」に関する議論が音楽という枠を超えて展開する。タラブ的感性の下では音楽であれ音声言語としての名称であれ、「音」は心理的に影響するだけでなく聴き手にある種のイメージをももたらす。特に名称に伴われるイメージはレパートリーと照らし合わせれば具体的な旋律でもあり、この研究の文化内在的考察の前半と理論的分析の後半をつなぐ役割を果たしている。この考察・検証を可能にしたのがアレppoに残る膨大なレパートリー群であった。特にそれらに精通しかつ「旧世代の最後の一人」と言われたムハンマド・カドリー・ダラール氏の協力を得たことは非常に幸運であったが、その一方で名称群の役割は同氏でも意識していなかったほどにこの伝統に馴染み、意識下に潜んでいたことも指摘しておく。